H5.8.21(土)㊏

西都大宰95p　4,597p

再訪98p

辛うじて 476p ㊞4602p 95p（西都大宰）

㊞4607p 12世紀末

㊞4585p

同じ場所（おなばしょ）に

【第三期】（最上層（さいじょうそう））

■第三期建物（たてもの）（朝堂院形式（ちょうどういんけいしき）をもつ建物（たてもの））は、〈天智（てんち）十年（六七一）十一月二十四日に炎上（えんじょう）した後（のち）〉再建（さいけん）され、――「藤原純友（ふじわらのすみとも）の乱（らん）」、つまり天慶（てんぎょう）四年（九四一）五月十九日の兵火（へいか）は辛（かろ）うじて免（まぬが）れたものの、十二世紀末（まつ）（平安時代末期（へいあんじだいまっき））ころ以降（いこう）、自然（しぜん）に崩（くず）れ落（お）ちていった》と考えてみたい。

■第二期建物（たてもの）が焼失（しょうしつ）した後（のち）、その堆積（たいせき）した焼土層（しょうどそう）を片付（かたづ）け、整地（せいち）し、この上（うえ）に第三期の中門（ちゅうもん）を再建（さいけん）している。しかも、~~これは~~、第二期の建物（たてもの）の不整合（ふせいごう）を是正（ぜせい）し、一部（いちぶ）では規模（きぼ）を拡張（かくちょう）しての再建（さいけん）である。（既述）~~つまり~~（ともあれ）、第三期政庁（せいちょう）は、最（もっと）も整備（せいび）された建物配置（たてものはいち）となっている。

■第二期の建物（たてもの）が、天智（てんち）十年（六七一）十一月二十四日に炎上（えんじょう）したとすれば、――では、第三期の建物（たてもの）は、いつ再興（さいこう）されたの~~であ~~だろうか。

■たぶん「炎上（えんじょう）した翌年（よくとし）（六七二）に勃発（ぼっぱつ）した壬申乱（じんしんのらん）の後（のち）、――そして朝鮮半島からの襲撃（しゅうげき）

最下層（さいかそう）

中門層（ちゅうもんそう）㊞4584p 2行

㊞4580p 7行

1192年 鎌倉時代

㊞4591p 1/4

西都大宰府97P
西都大宰府95〜96P ㊞4577P 4,598P
威厳103P
都府楼 1616P 大宰府の政 古代朝鮮218P ㊄4697P こと

の恐れが未だ解消されていない時期、つまり新羅が唐軍を朝鮮半島から追い出し~~たことにな~~た天武五年（六七六）以前のことであったろう。（第一巻末尾の年表（六七六年）の下段参照）

　すなわち、天武朝の当初頃に、大宰府の中門を始めとする炎上した建物の再建が行なわれたの~~であ~~だろう、と推測される。

　しかも、かなり慌しく復興工事は進められていったようである。

　玄海灘の向こうの唐・新羅軍に対して、《『大宰府』ここにあり》という威厳を示す為、早急な再建が必要だった~~のであろう~~と思われる。

　なるほど第三期建物は、第二期建物に較べて規模を拡張しており、外観上はより充実した政庁の姿を見せている。（「西都大宰府」藤井功、日本放送出版協会、九五〜九六頁参照）

　しかし、第三期政庁は最も整備された建物配置であるとはいえ、個々の遺構を細かくみると、第二期に比較して仕事が雑である。~~こと~~~~は否めない。~~

　例えば、基壇の石積みひとつとっても、遺

脇殿写真 ㊄4592ᴾ−2/2　天武天皇から聖武天皇の間に造営されたか？ ㊄4593ᴾ　塼 ㊄494ᴾ−1/2 ㊄4592ᴾ　4,599ᴾ

㊄4611ᴾ 6行～ 南門東西の築地の基壇は縮小 南門の基壇自体は拡大　西都大宰97ᴾ こと　削平 ㊄4615ᴾ 2行

構が最上層のため削平されたことを差し引いても、スチールが小さく、第二期のような精巧な仕事とはいえない。（「西都大宰府」藤井功、日本放送協会、九七頁参照）

■また南門（平城宮の朱雀門に相当）から東西に延びる築地についていえば、第二期の基壇幅は四・四㍍で四・五㍍をはかるのに対し、最終期の第三期の基壇幅はかなり狭くなっていて二・九㍍と三・二㍍しかない。（「西都大宰府」藤井功、日本放送協会、六八頁参照）

■なお、先にも述べたように、第三期当初頃の回廊の内は第二期と同様、建物の無い①石敷きの広場であったが、――――その後、その石敷きの広場内に、「塼」積みの「東殿」「西殿」各二棟づつ（計四棟）の脇殿が建てられたのであろうと見られる（写真図版Ⅳ４参照）

・脇殿四棟が何時建てられたのか、現時点では分からない。（要検討）

削除した

頃から

㊄4592ᴾ−2/2

南門（朱雀門に相当）㊄4607ᴾ 10行

コクヨ ケ−20 20×20

考察にみたい 国4.608P 1/5 7行

こくが 広ククろP 国衙 国司の役所

こと

4.600P

にほんきりゃく 日本記略 広1702P 西都大宰95P

てんぎょう 天慶 広1543P

純友の乱 国4574P 西都大宰94P

S63.11.30(水)国

国4603P 1行

前頁へ

■第三期の奈良（なら）・平安前期（へいあんぜんき）は古代律令国家（こだいりつりょうこっか）として隆盛（りゅうせい）をきわめた時（とき）であり、「遠（とお）の朝廷（みかど）」（大宰府（だざいふ））も大（おお）いにその一翼（いちよく）を担（にな）った。

■しかしやがて、内包（ないほう）する諸矛盾（しょむじゅん）は次第（しだい）に反体制勢力（はんたいせいせいりょく）の顕在化（けんざいか）をもたらすようになり、十世紀中葉（ちゅうよう）に至（いた）った時（とき）、東国（とうごく）に平将門（たいらのまさかど）の乱（らん）、西国（さいごく）に藤原純友（ふじわらのすみとも）の乱（らん）がおこった。

■「日本記略（にほんきりゃく）」は、藤原純友（ふじわらのすみとも）の乱（らん）について、「天慶（てんぎょう）四年（九四一）五月十九日、賊徒（ぞくと）（純友（すみとも））、大宰府（だざいふ）内を虜掠（りょりゃく）（人（ひと）をとりこにし、物（もの）を奪（うば）い取（と）ること）す」と述（の）べ、「扶桑略記（ふそうりゃっき）」「本朝世紀（ほんちょうせいき）」「将門純友東西軍記（まさかどすみともとうざいぐんき）」にこの間（かん）の事情（じじょう）が詳述（しょうじゅつ）され~~べら~~ている。（「西都大宰府」藤井功、日本放送出版協会、九四〜九五頁参照）

■ただし、[redacted]、藤原純友（ふじわらのすみとも）の乱（らん）は、国衙機関攻撃後（こくがきかんこうげきご）の戦略（せんりゃく）が「~~史料の制約もあって~~必（かなら）ずしも明確（めいかく）で~~は~~ないといわれる。（「日本史辞典」東京創元社、（承平（しょうへい）・天慶（てんぎょう）の乱（らん））参照）

■では~~ミニ、~~「藤原純友（ふじわらのすみとも）の乱（らん）」の概要（がいよう）について述べておこう。

*国衙機関（こくがきかん）を攻撃（こうげき）していないから明瞭（めいりょう）でないのではなかろうか

561

を担（にな）う

壊す（こわ）小林253ᴾ　西都大宰府95ᴾ　発願（ほつがん）広2041ᴾ　物の具（もの ぐ）調度品　広2198ᴾ　赤表紙「大和物語」297ᴾ　「西都大宰府」95ᴾ・「大和物語」233ᴾ　高等日本史140ᴾ　小野好古＝野大弐（ぬ）　追捕使広1471ᴾ　そう広1280ᴾ

4,601ᴾ

伊予国（いよのくに）の海賊（かいぞく）藤原純友（ふじわらのすみとも）は、千五百艘（そう）を率（ひき）いて反乱（はんらん）をおこし、小野好古（おののよしふる）を長官（ちょうかん）とする追捕（ついぶ）使、征南海賊使（せいなんかいぞくし）に追われ、大宰府（だざいふ）を襲撃（しゅうげき）した。

軍士（ぐんし）は壁（かべ）（外郭城壁（がいかくじょうへき）か）を出て防戦（ぼうせん）したが賊軍（ぞくぐん）に敗られた。

賊軍（ぞくぐん）は、大宰府（だざいふ）に侵入（しんにゅう）し、大宰府（だざいふ）累代（るいだい）の財（ざい）物（もつ）を奪い取（と）り、「放火（はなひ）焼府畢（ひつ）（ことごとく）」した。

この事件（じけん）によって、大宰府（だざいふ）の焼亡（しょうぼう）は広範囲（こうはんい）に及（およ）んだと推定（すいてい）される。

例（たと）えば、『大和（やまと）物語』第百二十六段（だん）に、

「筑紫（つくし）に住（す）める遊女（ゆうじょ）檜垣（ひがき）が、兵火（へいか）により家（いえ）も焼（や）けほろび、物（もの）の具（ぐ）（調度品（ちょうどひん））もみなとられはてて、云々」

という描写（びょうしゃ）がある。

また、天智天皇（てんちてんのう）が母斉明天皇（さいめい）のために発願（ほつがん）された『観世音寺（かんぜおんじ）』においても、海賊（かいぞく）たちにより、宝蔵（ほうぞう）の鏡（かがみ）四面（めん）が掠（かす）め取（と）られ、仏像（ぶつぞう）は壊（こわ）され、大刀（たち）、弓（ゆみ）、靫（ゆき）等が奪われた。

ともあれ、大宰府郭内（だざいふかくない）は、壊滅的（かいめつてき）な打撃（だげき）をこうむったようである。

なお、その後（ご）、博多津（はかたのつ）において賊軍（ぞくぐん）は敗れ

靫（ゆき）小林1053ᴾ　紀上209ᴾ5行

562　敗　焼府畢　小林660　おわる　ことごとく　次頁

H5.8.22(日)㊐

類焼 2336
禍 343p
4,602p

辛うじて ㊐4597p 6件
㊐4692p

次頁から

たという。（「西都大宰府」藤井功、日本放送出版協会、九五頁参照）

■それでは、この「藤原純友の乱」（九四一）の時に、大宰府政庁は、焼失したのだろうか。それとも、炎上をまぬがれたのであろうか。

■ここに、「第三期の建物が焼けていない」という事実から推測するとき、従来の諸説と違って、

「大宰府の町は広い範囲が焼かれ、「放火焼府畢」といった惨状であったが、何と「観世音寺」ばかりか大宰府の中枢部分である「政庁」もまた辛くも類焼の禍を蒙らずにすんだ」

ように想像される。

■~~すなわち~~つまり、大宰府の「観世音寺」と「都府楼」は、焼野原の北方部にポッン・ポッンと焼け残ったのかも知れない。

辛うじて ㊐4597p 6件 563 \ 類似

故見 以下記述　(国)4574P
「西都大宰府」95P 21行, 96P 5行
前頁へ

とはいえ
だが しかし

（天慶四年（九四一）五月十九日）
■従来、大宰府は『藤原純友の乱』の時の兵火によって終焉した、と見る説が有力~~であ~~だった。

■~~しかし~~しかしながら、大宰府政庁は~~年々~~被災しなかったので、――その後も、歴史書に『大宰府』の名が散見されるのであろう。

■なお、（藤原純友の乱以降）大宰府政庁を中心とする町は徐々に復興していった~~よう~~と思われる。

(国)4600P 9行

564　類焼　辛うじて (国)4597P 6行　辛くも 前頁12行

(国)5696P 1〜6　日本の歴史③読売128P, 247P　かんたん広503P
改行 刀伊　女真族 広1121P　沿海州 広250P　4,603P

（日本海北岸域）
平安中期の
■寛仁三年（一〇一九）、満州東北部から沿海州方面に居住した女真族、いわゆる刀伊の賊が二〜三千人、五十隻の船に分乗して、対馬・壱岐を襲い、さらに博多の町に押し寄せてきた。

■この刀伊侵入当時の大宰権帥は、関白藤原道隆の四子藤原隆家であった。■かつて、法

コクヨ　ケ-20　20×20
①

百科 19−324P　大辞1351P 平清盛　大弐（だいに）大宰府の次官 広1344P　小弐 広1104P　百科19−32XP（大宰府）　4,604P

日本の歴史(3) 読売 128P　豪胆 広749P　玉かづら 野上256P　国5709P　監（げん）広702P 大宰府の三等官 247P

皇（おう）の車（くるま）にさえ矢（や）を射込（いこ）んだほど豪胆（ごうたん）な隆家（たかいえ）は九州内の兵（へい）を召集（しょうしゅう）するいとまなく、大宰府役（だざいふやく）人（にん）を大（おお）いに激励（げきれい）しながら大宰（だざい）大監（げん）藤原致孝（むねたか）、大宰少監（げん）大蔵種材（おおくらのたねき）、左兵衛尉（さひょうえのじょう）藤原蔵規（まさのり）らと共（とも）に反撃（はんげき）して、ついに撃退（げきたい）した。

●『源氏物語（げんじものがたり）』玉鬘（たまかずら）の巻（まき）に「大宰府監（げん）として肥後国に多（おお）くの所領（しょりょう）をもった者（もの）の話（はなし）を載（の）せているが、これは、当時（とうじ）実在（じつざい）したこの藤原蔵規（まさのり）一族（いちぞく）をモデルにしたものであるという。（『日本の歴史』(3)読売新聞社、一二八頁、二四七頁参照）

■~~ところが~~もっとも十二世紀初（はじ）めを機（き）として権帥（ごんのそち）・大弐（だいに）・少弐（しょうに）はいずれも現地（げんち）に赴任（ふにん）しなくなり実権（じっけん）は地方豪族（ちほうごうぞく）（大宰府在庁官人（ざいちょうのかんじん））の手（て）に移（うつ）った。

■しかし大宰府（だざいふ）は、中国との外交関係途絶後（がいこうかんけいとぜつご）も、唐（とう）・宋（そう）の商船（しょうせん）との貿易管理（ぼうえきかんり）の中心機関（きかん）として、その重要性（じゅうようせい）に変（か）わることがなかった。

＊

■その後（ご）、平氏（へいし）は日宋貿易（にっそうぼうえき）の利（り）に着眼（ちゃくがん）し平清盛（たいらのきよもり）（一一一八〜一一八一）以来（いらい）積極的（せっきょくてき）経営（けいえい）を行（おこ）ない、有力者大宰府在庁官人（ゆうりょくしゃだざいふざいちょうのかんじん）原田種直を少弐（しょうに）に

いとま 時間のゆとり

人名辞典 533頁に無い

こと

565

コクヨ 20×20

4,605P

任命（にんめい）して大宰府（だざいふ）を支配（しはい）するにいたった。

■ここに、仁安（にんあん）元年（一一六六）大弐平頼盛（だいにたいらのよりもり）は保安（ほうあん）年間以降（いこう）の慣例（かんれい）を破（やぶ）り、大宰府（だざいふ）へ赴任（ふにん）した。（鳥羽（とば）・崇徳（すとく）朝の一一二〇～一一二四）から

1120→

1124→

高学日本史146P 広1468 広449P　百科19−324P　4,606P　西都大宰府99P

前頁へ

■壇の浦において平氏を滅ぼしたその年（一一八五）に、源頼朝は天野遠景を鎮西奉行に任命し、大宰府を支配した。……（中略）……その後継者武藤資頼が少弐に任ぜられ、以後子孫が累代その地位を継承して少弐氏を称するにおよび、大宰府の機能はまったく武家の手中に吸収されてしまった（という。）（「世界大百科事典」平凡社〈大宰府〉等参照）

（人名大辞典24頁に無い）（人名大辞典908に無い）

■~~もっとも~~とはいえ、大宰府遺跡調査の結果、第三期層に、十三世紀以降の出土品が無いので、大宰府政庁の生命はその頃終るとみられる。（「大宰府遺跡」鏡山猛、ニューサイエンス社、三一頁参照）

■~~それでは~~とすると、廃屋となった政庁にかわる庁舎はどこへ移されたの~~であ~~だろうか。残念ながらそれには答えられ~~とは出来~~ない。一つ言えるのは、十二世紀から鎌倉期にかけての遺物は観世音寺周辺で圧倒的に多く出土するということである。大宰府の中心は、東方へ次第に移動したよう~~である~~だ。（「西都大宰府」藤井功、日本放

1192年とする説がある
大宰府遺跡31P
三省堂日本史189
広辞苑449P
1185へ
1333とする

である　こと

全てが 次17行

H9.3.22(土)㊞
H11.11.14
うたかた 泡沫 190P
H31(2019)4.15(月)～4.15(3回) 令和元(2019)10.2(水)～10.4(4回) 4,607P
㊞4585P 1/3
よう 前頁20行
しゅうえん 終焉 1041P
S63.12.2(金)
㊞4597P 1192

送出版協会、九九頁参照）

■つまり、すなわち、我が国の歴史上長（れきしじょうなが）きにわたって栄華（えいが）を誇（ほこ）り、重要（じゅうよう）な役目（やくめ）を果（はた）し続（つづ）けてきた「大宰（だざい）府（ふ）」は、十二世紀末（まつ）ころ終焉（しゅうえん）の止（や）むなきに至（いた）ったようである（のだろう）。

前頁2行 10行

■そして打（う）ち捨（す）てられてしまった都府楼（とふろう）は、雨（あめ）や風（かぜ）にうたれ、荒（あ）れるにまかされ「―――いつしか「その形骸（けいがい）すら定（さだ）かならないまでになっていったと考えられる。

■政庁（せいちょう）の正面（しょうめん）の門（もん）である南門（なんもん）（朝堂院の南門に相当）から東西（とうざい）に延（の）びる築地（ついじ）（南面築地（なんめんついじ））の瓦（かわら）（第三期の瓦（かわら））も、ずるずるとすべり落（お）ち「―――素掘（すぼ）りの雨落溝（あまおちみぞ）の中（なか）に堆積（たいせき）し、やがて土（つち）に埋（う）もれてしまったのだった。（「西都大宰府」藤井功、日本放送協会、六八頁参照）

■こうして、「遠（とお）の朝廷（みかど）」とうたわれたほどの繁栄（はんえい）を極（きわ）めた都府楼（とふろう）の全（すべ）てが、ついに泡沫（うたかた）のようにはかなく消（き）え去（さ）り、―――――――苔（こけ）むす巨大（きょだい）な礎石（そせき）のみが、田畑（たはた）の只中（ただなか）に点在（てんざい）するだけとなってしまった。

※

10/4 1下 11/2 11/2

コクヨ ケー20 20×20
568
南門(朱雀門に相当)㊞4,599P 5行

日本社寺 536P

4,608P－1/5

菅原道真 広1183P　謫所 小林912P 罪のため流されたところ

「太宰府遺跡」59P　「西都大宰府」182頁

安楽寺（あんらくじ）の瓦（かわら）（「安楽之寺」の型（かた）押しのある瓦（かわら））

~~それではここに、ずいぶん唐突なことではあるが、~~「安楽寺（あんらくじ）」および「太宰府天満宮（だざいふてんまんぐう）」の創建年代（そうけんねんだい）について、考察してみ~~たい。~~よう。

トル

㊟4611P 18行

■「日本社寺大観」名著刊行会は「太宰府（だざいふ）神社」（太宰府天満宮（てんまんぐう））について、

「初（はじ）め、醍醐（だいご）天皇延喜（えんぎ）三年（九〇三）二月二十五日、道眞（みちざね）（菅原道眞（すがはらのみちざね））の謫所（たくしょ）（流（なが）されたところ）に薨（こう）ずるや、御笠（みかさ）郡四堂辺（あたり）に葬（はうむ）らんとせしに、柩車（きうしゃ）（ひつぎを乗せる車（くるま））、安（あん）楽（らく）寺の地に到（いた）り、止（とま）りて動かず。即（すなは）ち、其處（そこ）を以（もっ）て廟所（べうしょ）となすと伝（つた）ふ。この事（こと）、建久本天神記（けんきうぼんてんじんき）に見ゆ。次（つい）で、延喜（えんぎ）五年（九〇五）八月神託（しんたく）により、初（はじ）めて神殿を建て、天満大自在天（てんまんだいじざいてん）と称（しょう）す」

という。

述べておこう ㊟4600P 21行　569

天満宮に 太宰府天満宮とある

コクヨ ケ-20 20×20

①

H5.8.23(月)㊐
H9.3.23(日)

4.608P－2/5

みさけやすゆき
味酒安行 ㊐4614P－2/2 12行

百科 太宰府天満宮
⑲－324P

■また、『世界大百科事典』平凡社は「太宰府天満宮（てんまんぐう）」について、

「道真（みちざね）は、延喜（えんぎ）三年（九〇三）大宰府（だざいふ）の配（はい）所（しょ）、榎（えのき）寺の地（ち）（いま榎社のある所（ところ）という）で没（ぼっ）した。侍臣（じしん）の味酒安行（みさけやすゆき）は、その遺体（いたい）を、安楽寺（あんらくじ）の境内（けいだい）に葬（ほうむ）った。そして、翌々年（よくよくとし）の延喜（えんぎ）五年（九〇五）、その地（ち）に廟所（びょうしょ）が建（た）てられた。これが、天満宮（てんまんぐう）の起原（きげん）と伝（つた）えられている」という。（以下《第500・501図《写真図版225参照）

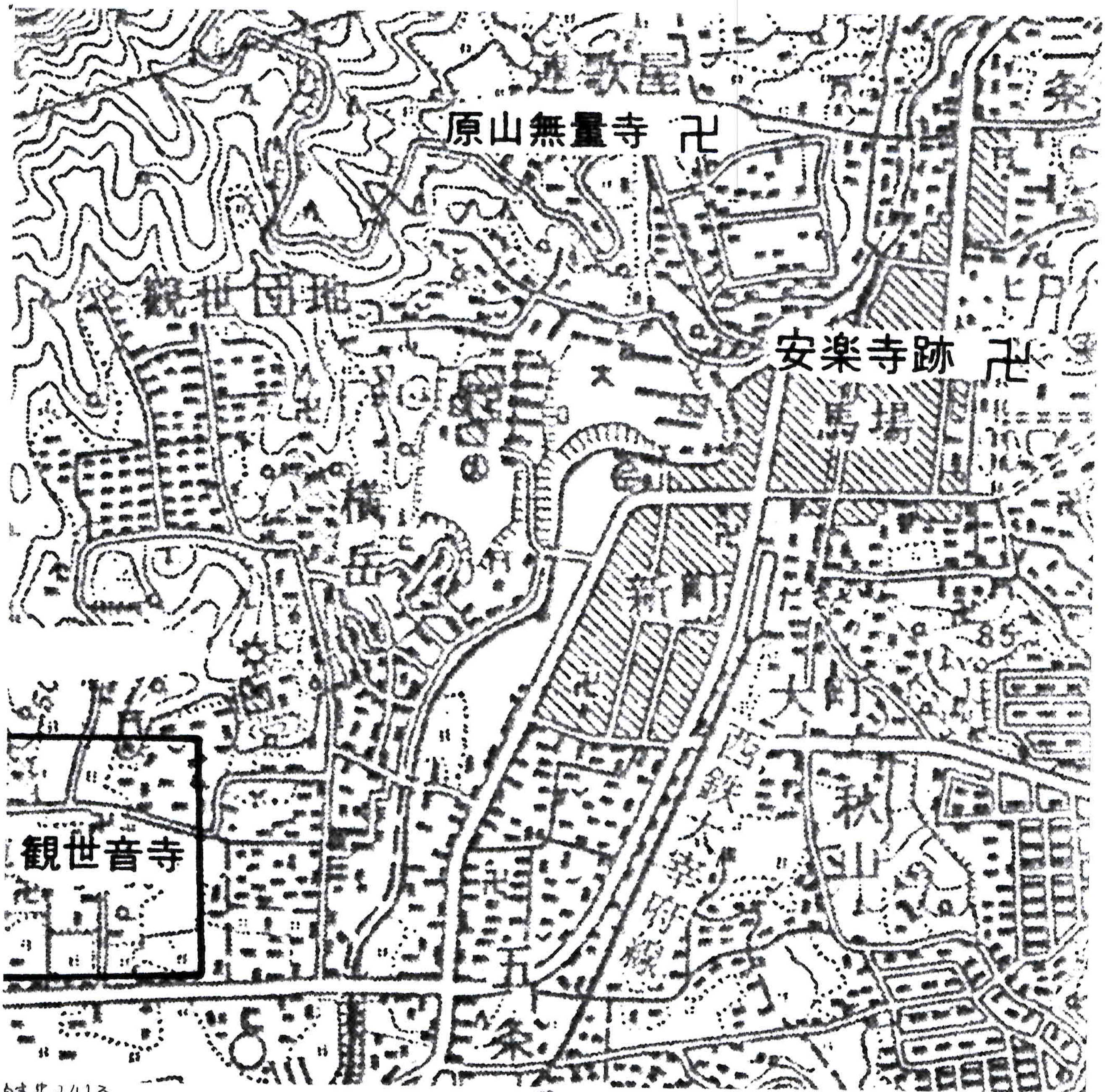
次頁
次々頁
次々々頁

＊

コクヨ ケ－20 20×20

・写真撮影して下さい。
・原山無量寺卍，安楽寺跡 卍，観世音寺 のみ ゴチ入力下さい。
・右頁の右上、1/4の大きさ。大きくはみ出させて下さい

4,608P－3/5



571

㊄4557P
－2/2

発掘が語る日本史2 541頁
日本社寺 854

日本社寺 536P あんらくじ
大宅 長野県 安楽寺
福岡県の歴史 山川出版 37P下

14QG
かんぜおんじ あんらくじ
第500図　観世音寺・安楽寺跡周辺図

13QG
『九州古瓦図録』九州歴史資料館↖柏書房↖昭和56年11月30日発行↖.

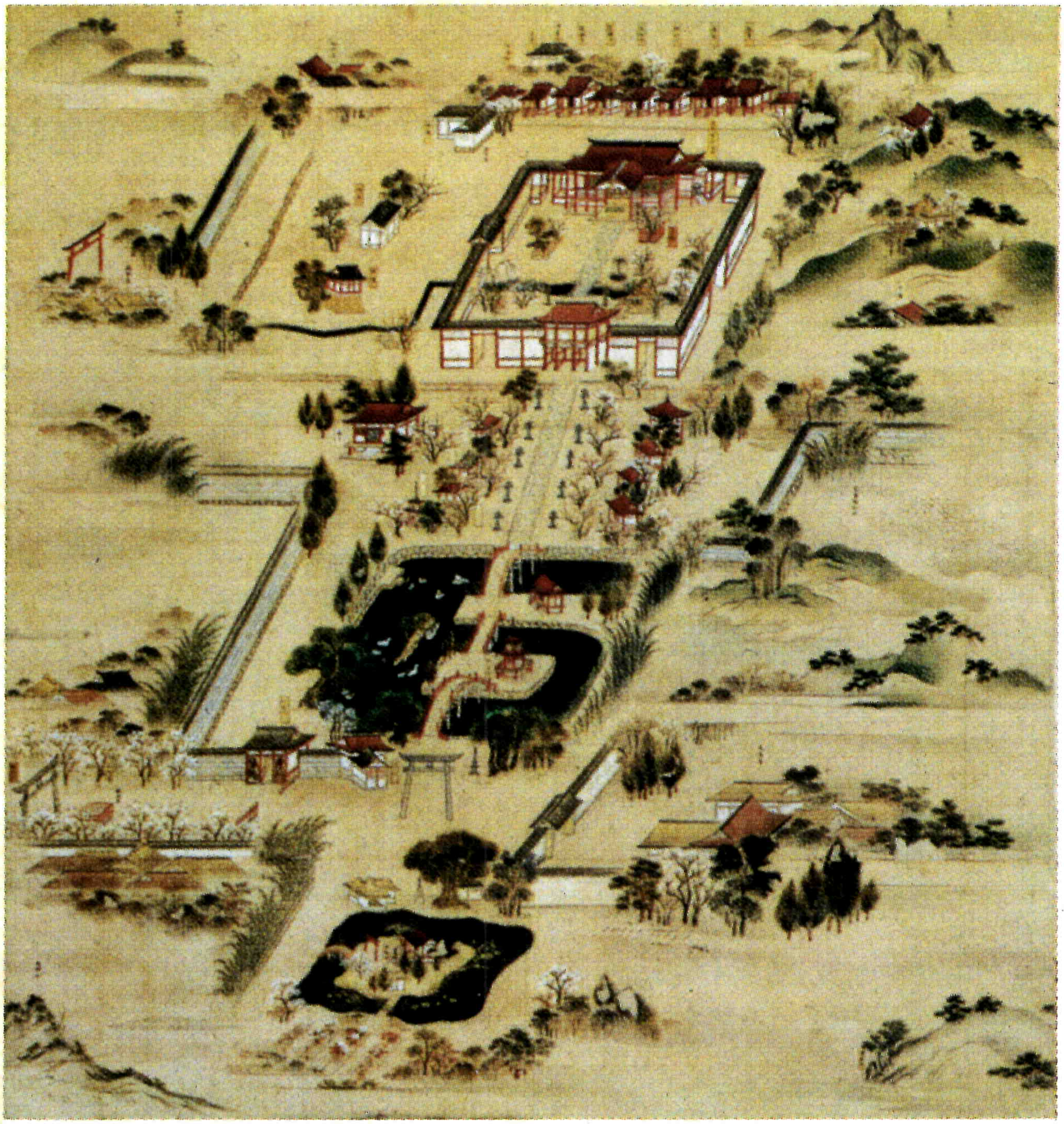
203頁参照

かんぜおんじ　いち　とおみかどだざいふ　しめ
13Q G・観世音寺の位置は、第497図〈遠の朝廷『大宰府』〉に示されている。

㊄4557P－2/2

・カラー
・右頁の左上（1/4頁）　大きくはみ出させて下さい。

4,608P−4/5



572

14QG　第501図　黒い字

天満宮境内絵図

12QG
- **紙本着色　縦184.6×横140.9cm**
- **江戸時代　重文**
- 17世紀末ごろに描かれたと推定される

トル ~~府天満宮境内図~~

ダブリ

13QG
『太宰府天満宮（だざいふてんまんぐう）』神社紀行(49)　学習研究社　2003年11月13日発行
16頁参照

4,608P－5/5

・カラー
・左頁の右上（1/4頁）　大きくはみ出させて下さい。

14Q
写真図版725　大宰府（だざいふてんまんぐう）天満宮の『飛梅（とびうめ）』

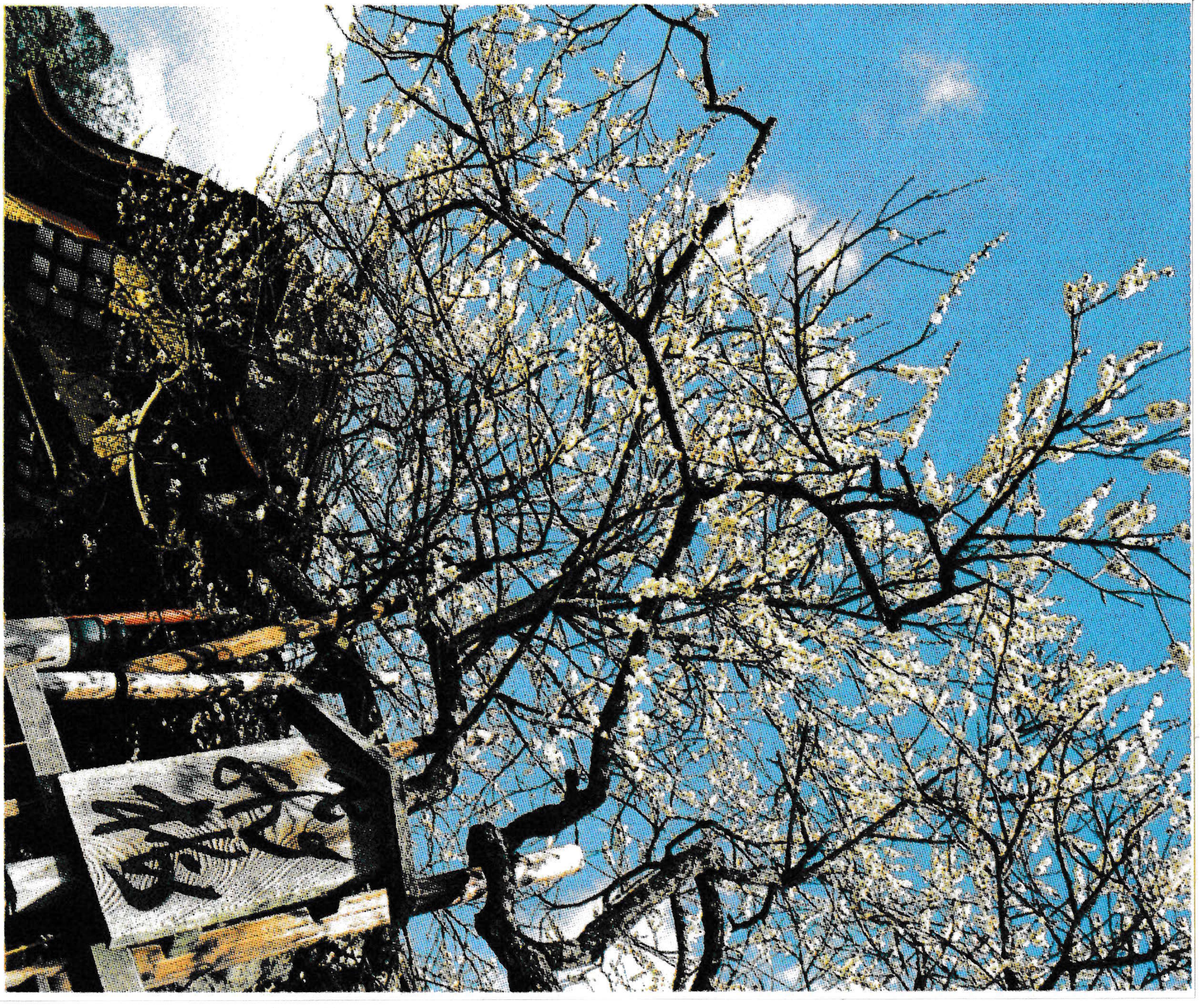
13Q
『大宰府天満宮』神社紀行(49)、学習研究社、2003年11月13日発行、4頁参照。

12Q
飛梅は、~~梅花をこよなく愛した~~道真（みちざね）公を慕って、~~はるばる~~京都から飛んできたとの伝承をもつ天満宮の御神木。境内には、約200種、6000本の梅の木があり、~~すべてが奉納されたもの。~~1月下旬から3月上旬ごろまで、紅白の花を咲かせる。

トル
トル
トル
トル

全てではない。
飛梅は飛んできた。

・頁の1/4の大きさ。



（第11巻）573

301

起原
起源 広523P

薨去 広732P 皇族または三位以上

天智10年11月24日
紀下380P
観世音寺も焼けたのだろう。百佛の同眼会の後 焼燒 ㊄4766P−2/2 11行へ

4,609P

ともあれ、『太宰府天満宮（てんまんぐう）』の起原（きげん）が、道眞（みちざね）薨去（こうきょ）（九〇三）の翌々年（よくよくとし）（九〇五）であることは確実（かくじつ）なのであろう。

それでは、道眞（みちざね）が葬（ほうむ）られたとされる『安楽寺（あんらくじ）』は、いつ創建（そうけん）されたのであろうか。

従来（じゅうらい）から「安楽寺（あんらくじ）は、すでに古（ふる）くからこの地（ち）にありその境内（けいだい）に墓地（ぼち）が営（いとな）まれていたのであろう」とする考え方がある。（「西都太宰府」藤井功、日本放送協会、一八二頁参照）

なるほど普遍（ふつう）に考える時（とき）、「道眞（みちざね）の遺体（いたい）を安楽寺（あんらくじ）の境内（けいだい）に葬（ほうむ）った」というのだから、安楽寺（あんらくじ）は道眞（みちざね）が薨（こう）じた延喜（えんぎ）三年（九〇三）当時（とうじ）、すでに存在（そんざい）していたように見われる。

トル

~~いうまでもなく定かでないが、もしかしたら、〈安楽寺（あんらくじ）は、天智（てんち）十年（六七一）十一月二十四日の『近江宮炎上（あふみのみやえんじょう）』（太宰府炎上（だざいふえんじょう））以前（いぜん）に創建（そうけん）された〉~~

㊄4611P 7行へ

「安楽寺の瓦」加藤門
ゆきの瓦溜りから出土

次頁3行

コクヨ ケ-10 20×20

㊄4766−2/2 13行

次頁2行まで

考察 考えしらべること 玄738P
「立て」 ㋭4554 ㋭4650P

南門の基壇拡張 西都大宰府56P
㋺4599P 8行 南門両西の築地の基壇は縮小

4,610P

入隅 内方の隅 玄155P
改行

◼さて、ここに述べておかなければならないことがある。

◼発掘調査の結果、大宰府政庁の『南門』は~~（平城宮の[illegible]に相当する門）~~は、創建の時期（第二期）も、建てかえ後（第三期）も、共に同じ規模であった。

●しかし~~ところが~~、（南門の）基壇自体は、建てかえの時に規模の拡張が行なわれている。

●（基壇の南側と東側は、後世の崩壊がいちじるしく、遺構は分からないものの、北面および西面の基壇を示す側石が、建てかえ後の第三期のものは、第二期に比較して約六〇センチほど拡張されている。

●そして、南門の西北部にあたる基壇と築地が接続する入隅の所に、第二期の瓦溜り（ＨＦ５５）があった。●この瓦溜りが、拡張された第三期の基壇の下に入っており、その瓦溜りの中から『安楽之寺』の型押しのある瓦片が多くの瓦とともに発見された。

という。（「西都大宰府」藤井功、日本放送

小林92P ～ソク 小林693P

㋭4608P-4/5 3行

コクヨ ケ-20 20×20

こと

4.611P　　刃4609P末

協会、五六頁参照）

■つまり、

〈『安楽元寺』（ルビなし）の型押（かたお）しのある瓦片（かわらへん）は、第二期の火災（かさい）の後（のち）に、他（ほか）の多（おお）くの瓦（かわら）とともに瓦（かわら）溜（だま）りの中（なか）に処分（しょぶん）され、——第三期の基壇（きだん）が、その瓦溜（かわらだま）りの上（うえ）に造（つく）られた〉

と解される。

■あるいは、

〈第二期の建造物（けんぞうぶつ）の屋根（やね）に用（もち）いられていた『安楽元寺』の型押（かたお）しのある瓦（かわら）は、天智（てんち）十年（六七一）十二月二十四日の『近江宮炎上（あふみのみやえんじょう）』（大宰府炎上（だざいふえんじょう））の際（さい）、数片（すうへん）に砕（くだ）け散（ち）り、他（ほか）の多（おお）くの瓦（かわら）とともに瓦溜（かわらだま）りの中（なか）に放（ほう）り込（こ）まれた〉

——そして、第三期（天武朝（てんむちょう））の基壇（きだん）が、その瓦溜（かわらだま）りの上（うえ）に据（す）えられた〉

ということを示しているのかも知れない。

＊

こと

ことと 平安 794
1192
⊕4610P 3行
西都大宰府 182P
欠番 4612P〜4615P
4,616P
⊕4612P ⊕4611P ⊕4576P ⊕4600P 天慶4年（941） ⊕4611P

トル トル

~~と解（かい）すべきなのかも知れない。~~

~~なるほど、~~

~~●延喜（えんぎ）五年〜延喜十五年（九〇五〜九一五）に創建（そうけん）された安楽寺（あんらくじ）の瓦（かわら）が、第二期の大宰府（だざいふ）の建物（けんちく）にも（トル）用（もち）いられていて、ー天慶（てんぎょう）四年（九四一）の藤原純友（ふじわらのすみとも）の乱（らん）の火災（かさい）の後（のち）、他（ほか）の多（おお）くの瓦（かわら）とともに瓦溜（かわらだま）りの中（なか）に捨（す）てられた。~~

~~●藤原純友乱後（ふじわらのすみともらんご）、在地勢力（ざいちせいりょく）の有力者（ゆうりょくしゃ）によって再建（さいけん）された第三期の大宰府政庁（だざいふせいちょう）の南門（なんもん）の基壇（きだん）が、その瓦溜（かわらだま）りの上（うえ）に造（つく）られた、~~

~~とも解（かい）せようが、この物語では採用（さいよう）しない。~~

▨安楽寺（あんらくじ）の創建年代（そうけんねんだい）は詳（つまび）らかでない。※

▨しかしながら、
〈安楽寺（あんらくじ）と天満宮（てんまんぐう）とが一体（いったい）となって繁栄（はんえい）するのは、平安中期以降（へいあんちゅうきいこう）である〉
ということは確（たし）かである。

▨菅原道真（すがわらのみちざね）が安楽寺（あんらくじ）の境内（けいだい）に葬（ほうむ）られた翌々年（よくよくとし）に、天満宮（てんまんぐう）が建立（こんりゅう）され、ーーこれ以後（いご）、安楽寺（あんらくじ）と天満宮（てんまんぐう）は、大（おお）きな力（ちから）を持（も）つに至（いた）った。

ことと

H29(2017) 4.26～30(月)
H30(2018) 11.6(火)～11.7(4回)
令和2(2020) 5.5(金)～6.6(4回)

6/6 1 下 6/6
6/5

4.617P

広1443P
中世 鎌倉～江戸末

■平安（へいあん）後期から中世（ちゅうせい）にかけての頃（ころ）の大宰府（だざいふ）の政治（せいじ）・文化（ぶんか）の主導力（しゅどうりょく）は、安楽寺（あんらくじ）が握（にぎ）っていたといってよい。

■安楽寺（あんらくじ）が所有（しょゆう）する荘園（しょうえん）は、北（きた）は壱岐（いき）、南（みなみ）は薩摩（さつま）にいたる約一〇〇所（しょ）におよび、

「安楽寺（あんらくじ）は、宇佐八幡宮（うさはちまんぐう）と、在地勢力（ざいちせいりょく）を二（に）分（ぶん）した」

という。（「西都大宰府」藤井功、日本放送出版協会、一八二し一八三頁参照）

＊

コクヨ ケ-20 20×20

万1ー27P
この行トル
作る
4.618P
6位以下　日本史辞 167P　縷縷（るる）広 2339P
㊄462P 3/2 柿本人麿の歌 いかさまに思ほしめせか 万1ー27P
㊄4622 1/3 15行下

柿本人麿（かきのもとのひとまろ）の苦悩（くのう）

■~~この物語では、~~これまで〈「近江宮（あふみのみや）」（大津宮（おほつのみや））~~と~~は、「娜大津宮（なのおほつのみや）」15 および「大宰府（だざいふ）」~~のこ~~とを指（さ）しているのであろう〉と~~考え、これまで~~縷縷（るる）述べてきた。

■~~それ~~では、~~ずっと~~後代（こうだい）の天武（てんむ）・持統（じとう）・文武（もんむ）朝に活躍（かつやく）した「柿本人麿（かきのもとのひとまろ）」~~（六位以下の官人（かんじん）の作（さく）~~~~という~~が詠（よ）んだ次（つぎ）の歌（うた）（万巻一ー二九）について、どう理解（りかい）すればよいのだろうか。

■詞書（ことばがき）に、
「近江（あふみ）の荒（あ）れたる都（みやこ）を過（す）ぐる時（とき）、柿本朝臣（かきのもとのあそみ）人麿（ひとまろ）の作（つく）る歌（うた）」
とあり、柿本人麿（かきのもとのひとまろ）はこう歌（うた）っている。

玉襷（たまたすき）　畝火（うねび）の山（やま）の　橿原（かしはら）の　日知（ひじり）の御代（みよ）ゆ
生（あ）れましし　神（かみ）のことごと　樛（つが）の木（き）の
いやつぎつぎに　天（あめ）の下（した）　知（し）らしめししを

<あける　<あける
「いやつぎつぎ」にかかる枕詞
㊄462P 3/2 10～12行
579

[redacted]

㊀46之らに要約　4,619P

㊀き 霧る　はるひ 春日 古くはハルヒ

やまとにかかる枕

天(そら)にみつ　倭(やまと)を置(お)きて　あをによし26

奈良山(ならやま)を越(こ)え　いかさまに　思(おも)ほしめせか

天離(あまざか)る25　夷(ひな)にはあれど　石走(いはばし)る

淡海(あふみ)の國(くに)の　楽浪(ささなみ)の　大津(おほつ)の宮(みや)に26　天(あめ)の下(した)

知(し)らしめしけむ　天皇(すめろき)の　神(かみ)の尊(みこと)の

大宮(おほみや)は26　此處(ここ)と聞(き)けども　大殿(おほとの)は

此處(ここ)と言(い)へども　春草(はるくさ)の24　繁(しげ)く生(お)ひたる

霞(かすみ)立(た)ち　春日(はるひ)の霧(き)れる　ももしきの24

大宮處(おほみやどころ)　見(み)れば悲(かな)しも16

12.5〈大意〉神武(じんむ)天皇の御代(みよ)以来(いらい)お生(うま)れになった天皇のすべてが、つぎつぎに天下(あめのした)をお治(おさ)めになった大和(やまと)の国(くに)をすてて、奈良山(ならやま)を越(こ)え、何(なん)とお思(おも)いになったからか、田舎(いなか)ではあるが、近江(あふみ)の国(くに)の大津(おほつ)の宮(みや)で天下(あめのした)をお治(おさ)めになったという天智(てんぢ)天皇の皇居(こうきょ)は、ここと聞(き)くけれど、御殿(ごてん)はここだというけれど、今(いま)は春草(はるくさ)が繁(しげ)く伸(の)びている、霞(かすみ)が立(た)って春(はる)の日(ひ)ざしがにぶく霞(かす)んでいる、この大宮(おほみや)の跡(あと)を見(み)れば心悲(こころかな)しい。

※

＜あける　＜あける

近江などにかかる枕

①

コクヨ　ケー20　20×20

紀下170P　信憑性 広1162P　小野氏㊥5392P　4,620P　㊥5421P-岩波　㊥5421P-岩波 OK　紀小未491P　㊥5390-3/3　こと　小野氏㊥5392P　紀年 広543P　記(旦)126P　紀小未OK

■「柿本臣」や「小野臣」らは、孝昭天皇の皇子天押帯日子命の子孫である、という。（孝昭記参照）

・また、日本書紀の紀年によると、
〈孝昭天皇（在位前四七五～前三九三年）は「信じ難い遥かな大昔の天皇である〉
ということになる。

■しかしながら、察するところ、
〈孝昭天皇は、欽明天皇（在位五三一頃～五七一）、あるいは敏達天皇（在位五七二～五八~~四~~五頃）とほぼ同時期の日辺日本国（近畿地方）の天皇だったのであろう〉
と思われる。（第一表参照）

・~~よって~~こう解釈する時、孝昭記に記載の、
「柿本臣や小野臣らは、孝昭天皇の皇子の子孫である」
という出自にも、~~かなり~~信憑性があるように思えてくる。

■~~ところが~~とはいえ、第二期二朝時代末代の日辺日本国の天皇「孝元天皇」は、大倭国（肥後国）の「崇峻天皇」の五年に東漢直駒の手によっ

㊥5421P-2/2 前正ス3

弑逆（しぎゃく）　云953'　紀下170'「弑せまつらむ」とある

（こと）　制定　云1227'　おきてを定めること

て弑逆（しぎゃく）されてしまわれたのであろう。（既述）

■ここに、西（にし）の大倭国（やまとのくに）（肥後国）に推古（すいこ）天皇①と、東（ひがし）の大和国に等与刀弥々（とよとみみ）大王（＝開化（かいか）天皇）が即位（そくい）されて、第三期二朝時代を迎（むか）えた~~こと~~のと~~であった~~ではなかろうか。（第一表参照）

■~~だが、~~けれどもやがて等与刀弥々（とよとみみ）大王は、「二朝有（ふたちょうあ）るべからず」とお考えになり、

(1)自（みずか）らは天皇位（い）を辞退（じたい）し（太上天皇（だいじょうてんのう）でなく）皇太子になられた。

(2)また、西と東の両朝（りょうちょう）に分れて奉仕（ほうし）していた数多（かずおお）くの廷臣（ていしん）達を、一系列下（いちけいれつか）に置（お）く為（ため）「冠位（かんい）十二階（かい）」が制定（せいてい）されたの~~であ~~だろう、と推察される。

■こうして、孝昭（こうしょう）天皇の子孫（しそん）~~である~~「柿本臣（かきのもとのおみ）」や「小野臣（をののおみ）」らも、新（あたら）しい秩序（ちつじょ）のもとで宮仕（みやづか）えすることになったと思われる。

＊

資料⑤－347ｐ　日本史年168ｐ　続紀(白)①－76ｐ　㊥4630ｐ－2/3　4,621ｐ－2/2　紀下622ｐ　大社小野妹子 6位相当 ついては㊥4618ｐ 11行　日本史年167ｐ 天武 日本書紀下622ｐ　「ところで」㊥4595ｐ ㊥4641ｐ ㊥4620ｐ

~~ところで、先に述べたように、『古事記』によると、「柿本氏は、孝昭天皇の御子天押帯日子命を祖とする」という。~~

そして、『柿本氏』および『柿本人麿』に~~ついて~~関して、参考迄に述べると、

①『新撰姓氏録』には、敏達天皇の世、家門に柿の木があったので柿本を名のったとある。もと柿本臣であったが、天武十三年（六八五）朝臣となった。

人麻呂の名は史書にみえない。元明天皇の和銅元年（七〇八）四月に従四位下で卒した柿本朝臣佐留（猨ともいう）の名がみえるのみで、その人（佐留）との間柄は不明である。史にみえない~~こと~~のは、六位以下の身分であったことを思わせる。その死は、臨終の作のおさめられた位置から考えて、和銅二〜三年（七〇九〜七一〇）ころと考えられる。――賀茂真淵が『五十にいたらで身まかりしなるべし』といっているのが、だいたいあたっていると思われる。天智の御世に生まれ

㊥1895ｐ－2/4　583 天武紀 紀10.12.29　704 紀 柿本佐留卒　㊥4620ｐ 10行 敏達天皇

人名大事典 137ｐ OK 詠（よ）む 小林 896ｐ 舎人（とねり） 広1612ｐ 掌（つかさど）る 小林433ｐ 人名辞 137ｐ

4,622ｐ−1/3

日本史辞 167ｐ 百科⑤−347ｐ 万①−125頁

「あった」 1字下げる 下ゲる

持統（じとう）・文武（もんむ）の御世（みよ）に仕（つか）えて多（おお）くの作（さく）をなした家は、藤原京（ふじわらきょう）の北東郊（こう）、三輪山（みわやま）の西麓（せいろく）近（ちか）くところにあったらしい。かつて畝傍山（うねびやま）のふもと、軽（かる）の地（ち）に人目（ひとめ）をしのんで会（あ）っていた女（おんな）があったが、早（はや）く死んだ。のち同居（どうきょ）して子供（こども）を産（う）んだ妻（つま）とも死別（しべつ）している。晩年（ばんねん）、石見（いわみ）の国で契（ちぎ）った人（ひと）もあった」

という。（「世界大百科事典」平凡社〈柿本人麻呂（かきのもとのひとまろ）。「日本史辞典」東京創元社〈柿本人麻呂〉参照）

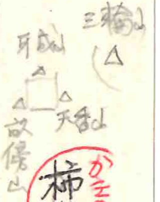
②また、

「柿本人麻呂（かきのもとのひとまろ）は、舎人（とねり）（天皇・皇族（こうぞく）などに近侍（きんじ）し「雑事（ざつじ）を掌（つかさど）ったもの」として、持統（じとう）・文武（もんむ）両（りょう）天皇に仕（つか）えたと伝（つた）えられるが詳細（しょうさい）は不（ふ）明（めい）。天皇や皇子の行幸（ぎょうこう）・行啓（ぎょうけい）に従（したが）って歌（うた）を詠（よ）んだり、皇室（こうしつ）の大葬（たいそう）のときには挽歌（ばんか）を作（つく）って奉（たてまつ）るなど、宮廷詩人（きゅうていしじん）のような役目（やくめ）をしていたという。また、地方官吏（ちほうかんり）として巡察使（じゅんさつし）に従（したが）り、近江（おうみ）・越前（えちぜん）・石見（いわみ）（島根県）・筑紫（つくし）の各（かく）地（ち）を歩（ある）き、石見（いわみ）で七〇八年（和銅（わどう）元年）ごろ亡（な）くなった」

西郊 都のはずれ 町はずれ 都の外

84

柿本人麻呂（かきのもとのひとまろ）の



を生んだ

万①−125頁 9行

七〇九〜七一〇か 前から17行

次頁11行

⑩4618ｐ 11行

あざむ 欺く 31p 玄
続紀索引 48p 末
㊞4630-2/2 同段「柿本朝臣」はある。こと
柿一の謎 4p
ずいいち 随一 1169p 玄 ㊞4625
4,622p-2/3
天つキ 2行
あ 挙げる 26p 玄
じょし 序詞 大カンワ 7kip 語句の上に冠する一種の修飾語
人名辞典 137p

ともいう。〈「人名大事典」谷山茂、むさし書房、〈柿本人麻呂〉参照〉

　つまり、宮廷の要望に適った歌を作るのが柿本人麿の役目だったのであろう。（第502図〈柿本人麻呂画像〉参照）

③さらに、「柿本人麻呂は、万葉集の歌人の中で第一等に挙げられ、『歌聖』また『歌神』とたたえられている。作風は雄大で荘厳、序詞や枕詞をたくみに用いて力強い格調をもっているとも言われる。〈「人名大事典」谷山茂、むさし書房、〈柿本人麻呂〉参照〉

※

■ところが、万葉集中随一の歌人であることは明白であるにもかかわらず、『日本書紀』や『続日本紀』といった同時代の正史には、柿本人麿の名が見えない。

■これは、どういうことなのだろうか。

■あるいはもしかしたら、〈柿本人麿は、職務として〈いわば後世の着達を欺く為――〈朝廷の趣意に沿い〉――歴史的事実と異なる歌を、さも真実のことであるかのように〈荘厳に格調高く歌いあげていった〉

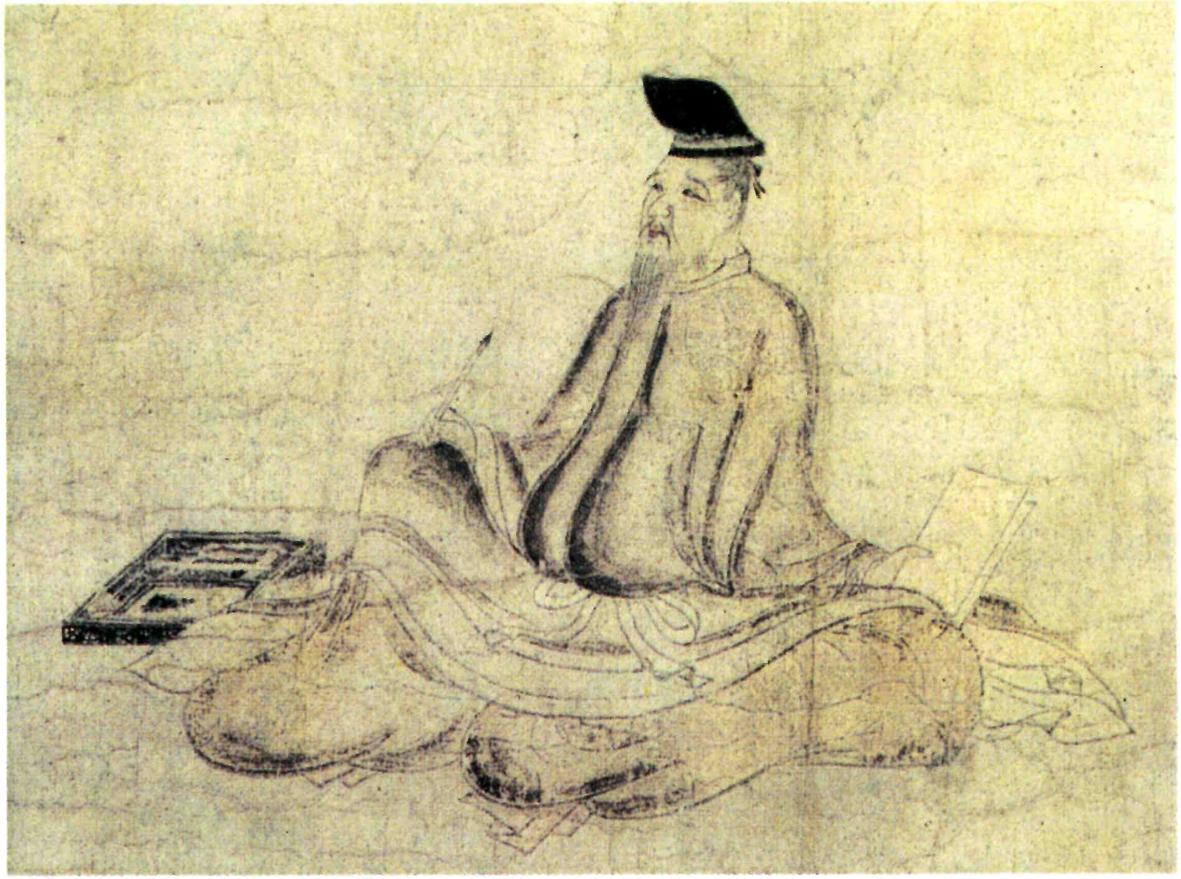
85

コクヨ　ケ－20　20×20

だというのは 585 そ 沿う
こと
最上
次頁
沿った

㊥4630P-3/4にも柿本人麻呂。

・カラー
・右頁の上半分に
大きく掲載下さい。



注。14QG 第502図 柿本人麻呂（かきのもとのひとまろ）画像（鎌倉時代、重文）
12QG（佐竹本（さたけぼん）「三十六歌仙絵（かせんえ）」より）

13QG 『大神神社（おおみわ）・石上神宮（いそのかみ）』神社紀行(8) 学習研究社、2003年1月2日発行、27頁参照。

12QG ・絵は、藤原信実（ふじわらののぶざね）作と伝えられ、現存の歌仙図（かせんず）でもっとも古く、傑出（けっしゅつ）する。

H.S.8.27(金)回　那大津宮　回4553P　見る影も無く　広2139P
虎の朝廷　4569P −1/2

4,623P−1/3

回4618P〜
(赤)4619Pに歌・訳あり。

ということを示唆（しさ）しているのかも知れない。

すなわち、先述の歌（万巻一―二九）においても、――柿本人麿（かきのもとのひとまろ）は、事実（じじつ）を知っていながらあえて、知らない風（ふう）をよそおい、

「神武（じんむ）天皇以来（いらい）の天皇がお治（おさ）めになった大和国をすてて近江国（あふみのくに）の大津宮（おほつのみや）で天（あめ）の下（した）をお治（おさ）めになられた天智（てんち）天皇の皇居は、此処（ここ）であると聞（き）くけれど、今（いま）は春草（はるくさ）が繁（しげ）っていて、この大宮（おおみや）の跡（あと）を見（み）れば、心悲（こころがな）しい」

という歌（うた）を作（つく）ったのではあるまいか。

それにしても、近江国（あふみのくに）の大宮（おおみや）の跡（あと）として示（しめ）された場所（ばしょ）に立（た）ってあたりを見渡（みわた）してみたとき、――歌人（かじん）柿本人麿（かきのもとのひとまろ）の心（こころ）は、どんなにかつれなく悲（かな）しかったことであろう。

いや、本当（ほんとう）はそうではなく、柿本人麿（かきのもとのひとまろ）は、巡察使（じゅんさつし）に従（したが）って筑紫国（つくしのくに）の博多湾（はかたわん）にのぞむ大津（おほつ）宮跡（みやあと）「那大津宮跡（なのおほつのみやあと）」を訪（おとず）れ、

13.5回
「（那（なの））大津宮跡（おほつのみやあと）は見（み）る影（かげ）も無（な）く寂（さび）れ御殿（ごてん）があったところさえ分（わ）からなくなっており、春草（はるくさ）が繁（しげ）く伸（の）びていて、わびしく、心悲（こころがな）しい」

回4619P 7行

次頁から　「大宰府遺跡」9P　万04-165　㊥4622P-1/2　4,623P-2/3　㊥4622P-1 末　眼の当（まあたり）広2090P　滲む広1693P　余韻（よいん）広2266P

という歌を作ったようにも思われる。

荘重な響きが漂うこの歌の余韻に、ーーーーいい知れない、深い悲しみが滲んでいて、心を打つ。

・いうまでもなく、定かでないが、〈柿本人麿は、雑草がおい繁っている娜の大津宮の跡に立って昔をしのび、歌を詠んだ〉ということの物語では考えてみたい。

※

■また、あえて述べると、〈地方官吏として巡察使に従い「筑紫国へ旅をした当時、——柿本人麿は、次のような歌も作ったのであろう〉と想像される。

図 大君の遠の朝廷とあり通ふ島門を見れば神代し思ほゆ（万巻三―三〇四）

〈大意〉大君の遠の朝廷（大宰府）へと、人々が常に往来する島門（延喜駅制の筑前国島門駅で、いま遠賀郡遠賀町に島門という地

・5万分の1「直方」図 遠賀町あたりに島門はみえない
・ぽさたるか作 394P 遠賀町に島津があるが島門はない

コクヨ　ケー20'　20×20